

沖藤典子

ジェット娘が結婚する時

当世親子事情



沖藤典子

シエツト娘が結婚する時

当世親子事情



△著者紹介▽

沖藤典子（おきふじ のりこ）

一九三八年、北海道に生まれる。

一九六一年、北海道大学文学部哲

学科心理学教室を卒業。同年上京

し、日本リサーチセンター調査部

に入社。一九七六年、夫の転勤の

ために、十五年間働いていた会社

を退社。

その後、自己の体験をもとに『働

く女性の生き方』『老人介護の問

題』などをテーマに、著作や、テ

レビ講演に幅広く活躍している。

主な著書に『女が職場を去る日』

（新潮社）、『女が会社へ行きたく

ない朝』（主婦と生活社）、『女が

職場で悩むとき』（主婦と生活社）

がある。

ジェット娘が結婚する時

平成元年七月十日 初版発行

著者 沖藤典子

発行者 村川修二郎

発行所 主婦と生活社

振替 東京〇一三六三六四

印刷所 松濤印刷株式会社

製本所 太陽印刷工業株式会社

株式会社小泉製本

東京都中央区京橋三丁目五番七号 〒一〇四

TEL販売部（五六三）五二二一 編集部（五六三）五二三五

© Noriko Okifuji, 1989 Printed in Japan

（落丁・乱丁本は、お取り替えいたします）

ISBN4-391-11174-8

本書の内容を小社に無断で複写複製することを禁じます。

ジェット娘が結婚する時

目次

第1章

舞い込んだ結婚宣言……

7

母の心は大いに揺れる

8

パパだ、デカシた！

18

ブライスクんの誓い

22

元気の出る恋がいい

28

女は晩婚に限る

34

第2章

母娘激突の思春期……

45

男友達はバイキンだ

46

ほんとうの愛とは

53

大学なんていくもんか

59

親の“期待”と娘の“反対”

72

花のOLになってはみたが

82

留学という手があった

91

第3章

目的探しのアメリカ留学……

101

英語学校は「恐怖のステテン」

102

海外留学で娘は変わった

112

目的を探しあてる

121

母親は乗り越えるべき壁

128

卒業式は家族のお祭り

138

第4章

わが家のタイム・カプセル……

147

共働きママの子として

148

育ちの分かちあい

157

助けられた父との同居

167

働く母親の罪の意識

175

母さんを軽蔑するかい？

182

婚約者にどこまで話すか

195

娘は夫婦別姓を選んだ

204

第5章

親ばなれ子ばなれ結婚式

211

アメリカ流結婚式作法

212

ブライス・イズ・ラッキー

220

この結婚に後悔していない？

231

涙、涙の結婚式

240

簡素で陽気な披露宴

246

遠くても近い母と娘

254

中年夫婦だけの再出発

260

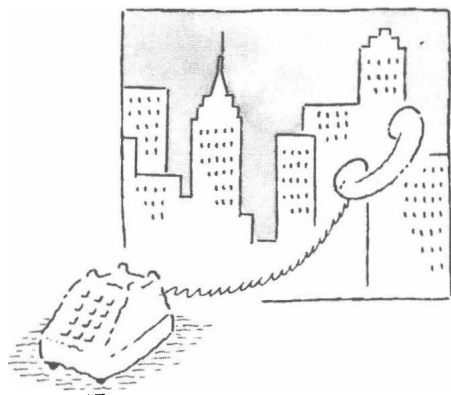
あとがき

268

本文イラスト 木原千春

ジェット娘が結婚する時

第1章
舞い込んだ結婚宣言



母の心は大いに揺れる

「私ね、ブライスからプロポーズの手紙もらっちゃった」

国際電話は、相手の声がワテンボずれるように感じる。波の音にも似たかすかな雑音に混じって、その声は、どこかのんびりしたものに聞こえた。アメリカにいる長女の晶子からの電話だった。

「玲子もスペインに行ってしまったってママが淋しがっていると思うと、言おうかどうか迷ったんだけど……」

十月初めの朝のことだった。

一か月ほど前、下の娘の玲子がスペインに留学し、夫婦二人だけになった。子別れは、その自由への期待を裏切って想像以上の淋しさだった。無気力になり、寒くもないのに体が震えた。

別れる前のほうがひどかった。実際にいなくなってみると、それなりに度胸も座ったような気がする。夫婦二人でやっていかねばならぬと覚悟もできた。軽いウツ症状であったらしく、「秋風が吹くころにはよくなりますよ」と医師に言われ、ようやく調子が出始めたころであった。

明るくすきとおった秋の陽ざしが、レースのカーテンからやわらかくこぼれている。

「氣を使わせてごめん。ママのほうは大丈夫よ。もうだいぶ馴れたから。子供がいなくてのもすがすがしくっていいもんだわ。それにあなた、そういう大事なことは、やっぱり、親にひと言あつ

て然るべきよ」

娘の氣遣いがうれしくて、私は元氣な声を出した。あとでゆっくり考えてみると、晶子の作戦にのせられたような氣もする。

「で、どうするつもりなの」

「そろそろさ、私もネ、グの納め時かと思って」

用心深い声だった。こちらの出方をうかがっている。ああ言えばこう言うと言算している声だ。なんと答えるべきか。よく考えたの？ まだ早いんじゃないの？ 結婚を決める前に親に会わせるべきなんじゃないの？ パパに相談してから、電話かけ直すわよ……。

一瞬の逡巡^{しゆんじゆん}があった。だが、どういうわけか、つぎの瞬間、言葉が飛び出していった。

「まあね。悪くない縁談だとは思うわよ」

「エンダン！」

晶子は不意をつかれて、驚いた声を出した。エ・ン・ダ・ンと、ひと言ずつ発音したあと、「クックッ」と笑い出した。つられて私も笑った。なぜか大声で笑った。

それは、了解の合図でもあった。

笑いながら私は言っていた。

「そう。プロポーズされたの。よかったわね。これで晶子もひと安心だ。おめでとう」

「ああよかった。ママに反対されたらどうしようかと思った」

「あなたさまとの長い歴史がありますからね。反対してもムダだってことをママもしっかり学ばせていただいていますよ」

「いやいや、それはご慧眼で。晶子ね、ママに喜んでもらいたかったのよ」

笑い声に混じって、テンポの速い会話が続く。娘の声は晴れやかなものになって、安心とうれしさが海を越えて飛んでくる。言い方は控え目だが、これはれっきとした結婚宣言なのである。私としては受けて立つ以外にない。

ついに「このとき」がきたか……。目尻にこみあがるものがある。それは大声で笑ったせいなのか、「縁談」という言葉にこめたさまざまな思いのせいなのか、私にもわからない。よかった、とする思いと、しまった、とする思いが交錯した。

ブライスクんとの恋愛が始まってから、これはひょっとすると……、と思ったこともあるが、現実のこととしては考えたくなかった。

世の母親は、娘から結婚を打ち明けられたとき、どのような感情を抱くものなのだろう。「花嫁の父」については感傷的な存在として語られているが、母親の場合はどういうものなのか。とくに初めて娘の結婚のときは？ 私の場合は、支離滅裂だったような気がする。私は言った。

「悪くない縁談だとは思うわよ」

恋愛して結婚しようというのに、見合いじゃあるまいし「縁談」もないものだ。とくに「悪くない」、これが曲者だった。

そこには私の打算、うれしさ、あきらめ、安堵、淋しさなど、入り乱れた感情がこめられている。いつてみれば、積極的に賛成しているわけじゃないのよ。でもあなたの決めたことだから、しぶながら認める。あるいは、あなたもネングの納め時がきたのね、これでひと安心だわ。よかったよかった。だけどやっぱりね……。

つまりは、どうとでもとれる言い方だった。反対して喧嘩になるのはまずいし、だからといって、二十七歳の結婚は、私に言わせればまだ早い。“花嫁の父”の悲哀とはまた違う淋しさもある。その一方で、娘に後ろ楯ができたことは、これ以上の安心はない。娘にそういう男が現れたことはうれしい。

とにかく、感情の大波が押し寄せてきた。これが“花嫁の母”の一筋縄ではいかぬ複雑なところだった。

そのうえ私には、もう一つ別の感情があった。これで娘はアメリカに留まることになる……。

アメリカに留学して四年がたっており、半年後に大学の卒業が控えていた。大学院への進学を希望しているのに、帰国はだいたい先のことになるだろう。しかし、その電話のときはまだ大学院の試験も受けていなかった。もし合格したら帰国はないが、不合格だったら、日本に帰ってくることもあるのではないか……。私とて、彼女が相当に猛烈な勉強をしていることを知っている。だから不合格を願ってはいない。合格を願いながら、帰国を願う。そんな矛盾した気持ちの中にいたのだった。

アメリカに娘を出したときから、あるいはこういうことになるかもしれないと思っではいた。手紙には、アメリカにずっといてもいいと書き続けていた。それは本心であった。しかし私の胸の内をよくよくのぞき込めば、大学を卒業したら帰ったほうが無難なのではないか、日本にいることの安泰を願う気持ちもあったのである。二つの本心があったといっただけかもしれない。一つの本心は娘に対して表明していたが、もう一つのほうは隠してあった。その秘密にしていたものが突然吹きあげ、私は狼狽したのだった。だから、“悪くない縁談”というような言い方しかなかった。

しかしながら私は、娘の選択と決断には、百パーセントの信頼をおいていた。彼女が決めたことだったら文句はない。ブライスくんは不足があるわけでもない。むしろ私は、お父さんが日本人、お母さんが中国系アメリカ人という、日本の血を引く青年を娘が選んだことを喜んでいた。私はよく肌は何色でもいいの、本人次第よ、と言っていたが、いざとなれば、同じ肌の色であることに安心した。

家庭環境もよく似ている。長い結婚生活を思えば、生まれ育った環境というのは無視できなかった。このあたり、私もわれながら意外なほど保守的だった。進歩的人間を気どっていても、ひと皮めくればこの程度。ブライス・ケン・マツオカの名をもつ、いつてみれば日系二世の青年に不満のあるはずもなかった。

もう一つ母親のエゴがあった。

ブライスくんが、IBMという大企業の研究所に勤めるコンピュータ技術者であったことだ。大企業に勤める理科系の男を夫にしている私は、つね日頃、大企業なんて最悪だと思っていた。娘の夫には文科系がよろしい。フリーでも小企業でも、個性的な職業の男がいい。

それなのに、大企業の名前を聞いてヘーと安心したのである。彼との恋愛が始まったころ、こんな会話を交わしている。

「その人IBMの研究所に勤めてるなんて、たいしたものじゃないの」

「そうかしら。IBMが大量に採用した年にうまく紛れ込んだのよ。私のほうがアタマイいわ」

「そりゃまあ、あなたのアタマのよさは認めますよ。だけどブライスだってまるっきりのバカじゃ入れないわよ。たいしたもんよ」

このたいしたもんよの感覚はずっと残っていた。

娘には世間体とか世の常識を期待しないといいながら、やっぱり安全無難な線を願っていた。このときになって初めて、世の母親が娘の結婚相手に大企業のブランド青年を求める気持ちが理解できた。自分が安心したのである。企業の安定などという先のことはわからないにしても、今のときのお墨付きがほしいのだった。母親としての役割を果たしたような、世間的にも聞こえがよいような、そんな満足感がほしいのだった。

なぜなのだろう。これも男の庇護ひきごを求めようとする女の企みののだろうか。いやいや、そうとばかりはいきれない。

「アメリカは離婚が多いから、経済の手段だけは絶対に手放せないわ」

と娘が言ったとき、私はニンマリして「そうだ、そうだ」と叫んでいるのである。結婚相手がいかなる男であろうと、女は経済の手段を放棄してはならない。私がそうであったように、娘も働く女であってほしい。

娘の結婚相手は平凡な男でいい。金持ちである必要もない。ソコソコの収入があつて、堅実に生きていく男であればいい。ブライスクンとはまさにそういう男なのだ。そこに若干ミエが加わつた。そういうことではなかったろうか。正直いつてこういうことを書くのは恥ずかしい。大企業の名を聞いて安心したとはいいいにくい。

しかし、「縁談」という言葉に含ませた意味内容を考えれば、そして大揺れに揺れた感情の嵐をよくみてみれば、アメリカに留まることになった娘に、母親としての安心のメドがほしかったというこの気持ち、これを素通りするわけにはいかなかったのである。

その一方で、この肌の色が同じ、大企業に勤めるということも、裏を返せば心配の種になる。人種差別は日本人にも無縁ではない。ブライスクンも、子供のころはいやな思いをたくさん味わったという。晶子自身は留学以来差別を受けたことはないというし、多くのアメリカ人に助けられてきた。しかし子供の世界は残酷だ。彼女の子供、つまり、私の孫は、肌の色で苦勞するのではないだろうか。それを思うと胸が痛む。

将来、日本に戻ることに。それはブライスクンが、「こんにちは」と「これは本ですか」程度の日本語しかしゃべれないのでは、まず望みがうすい。日本にいればまったくなんでもないことが、向こうでは苦勞の種になる。肌の色は一生つきまとう問題だ。

「大企業」のほうも考えてみれば心配だ。経済の安定ということはいえるだろうが、その一方で、アメリカのビジネスマンというのも相当に働き蜂ということだから、それが不安の種となる。家庭を妻まかせにしてしまうのではないか。

ムコの条件というものを、あれこれ真剣に考えたこともなかったが、いざその話がもちあがってみると、そのことをまったく無視するわけにはいかない。

漠然と考えていたことは、当然ながら、深く愛しあっていること、これは絶対条件である。愛してもいないのに、年だから、外国にいて淋しいから、あるいはほかのなんらかの理由で、一点でも妥協の余地が入っているのは許せない。

昔の育児ノートを見てみると、八歳の娘に向かって、

「晶子はほんとうに好きだと思った人と結婚するのよ」

などと訓示を垂れている。